

# 現代日本語における動詞連用形の形態統語論的考察

## — 拡散形態論の観点から —

田川 拓海 (筑波大学大学院)  
takumi929@mvj.biglobe.ne.jp

### 0. はじめに

#### ◆目的

- (1) a. 動詞の連用形を題材に、日本語の述部（主要部）の形態統語論的性質を考察し、「活用」という現象が形式的な言語理論においてどのように分析されるか、という点についての仮説を提出する。
- b. (1a)で提出した仮説を採用することによって、動詞の活用の中でもその現れる環境が最も多彩である連用形が、ただ一つの形態論規則に従って具現されていることを示す。

#### ◆研究対象: 動詞の連用形

- ・本発表では「動詞の連用形」とは、「ます」、「て」、「ながら」などに前接する動詞の形態のことを指す。具体的には、以下のような例における下線部の部分である。なお、音便形 ((2a)) の場合も連用形に含めて考える<sup>1</sup>。
- (2) a. 自分で走ります。
  - b. 前半は走って、後半は歩いた。

### 1. 活用の研究と連用形の問題

- ・「活用 (形)」が日本語の研究において常に多くの議論の対象となってきたことは明らかである。しかし、形式的な統語理論の観点からはほとんど研究がなされていない。  
→「活用」を「文法的環境と対応して述語の形態が異なる形態をとる現象」と捉えれば (cf. 奥津(1981))、形式的な形態統語論的研究の非常に興味深い対象となるはずである。
  - ・いわゆる日本語学の領域においては、学校文法に代表されるような「形態とそれが担う意味や機能に何らかの対応を見出す」アプローチに対して、形態に縛られず「意味や機能を重視する」というような代案が提唱されてきた (城田(1998), 村木(2002)) などを参照されたい。
- (3) a. ある単語が語形変化の体系を備え、それらのうちのひとつあるいはふたつ以上が、用言にかかる機能を果たしているもの
  - b. 動詞「たべる」の連用形としては、  
たべて (くらす) / たべたり (する) / たべても / たべ、 / たべながら…  
(村木(2002): 135-136)
- ・このようなアプローチは、形態と機能の不一致を、機能を重視する (すなわち「連用」という名称を重視する) ことによって解消しようとするものであると考えられる。  
→しかし、一方で「ある環境下において述語が同一の形態で現れる」という点をうまく捉えられない。

<sup>1</sup> 発表者は動詞の連用形と形容(動)詞の連用形は統語論的に異なったものであると考えている。以降、単純に連用形と言った場合は動詞の連用形のことを指す。

- ・例えば、命令形については機能と形態がほぼ一対一対応しているので問題は無いかもしれないが、(特に)連用形については大きな問題が生じる。なぜなら連用形は様々な環境に現れ、複合動詞内に現れたり ((4b))、同形態が名詞として使用されたり ((4c)) もするからである。

- (4) a. 太郎は一生懸命考え、その答えを導いた。  
 b. 太郎は突然その子供を押し倒した。  
 c. 太郎の考えが甘いことには皆気付いていた。

- ・そもそも構文論的に連用形を規定しようとする立場では、(4b, c)はうまく体系に組み込むことができない。  
 →しかし、(4b, c)が(4a)など同一の形態で具現するというのもまた事実である。

- ・本発表では、活用という現象を統語論的な観点から捉え、拡散形態論 (Distributed Morphology, 以下 DM: Halle and Marantz(1993)他) を採用することによって、連用形がただ一つの形態論的規則に従って現れていると分析できることを示す。

## 2. 連用形の出現環境

- ①動詞句をとりたてた時に現れる。

- (5) a. 決して忘れはしないだろう。  
 b. 大声をあげすらした。  
 c. その絵を見もしなかった。

- ②一部のいわゆる助動詞に前接する形態として現れる。

→そうだ (様態)、ます、…

- (6) a. 彼女は今にも泣きそうだ。  
 b. 私がやります。

- ③連用形の形態のみで従属節になる。

- (7) a. 口を大きく開け、深呼吸をした。  
 b. 太郎は歌い、次郎は踊った。

- ④一部の接続形式に前接する。

→て、ながら、つつ、に (目的)、たら、たり、…

- (8) a. 腕を大きく振って行進した。  
 b. テレビを見ながら論文を読んだ。  
 c. 歩行者に注意を払いつつ徐行してください。  
 d. 本を買いに行った。  
 e. 雨が降ったらやめにしよう。  
 f. 絵を描いたりして暮らしていた。

- ⑤動詞句や動詞そのものに付加し範疇を変化させる接尾辞 (影山(1993), 伊藤・杉岡(2002)) の前に現れる。

→～方、～手、～役、～主、…

- (9) 雨の降り方、政権の担い手、荷物の運び役、…

⑥複合動詞の要素として現れる（複合動詞の詳しい分類、諸特徴に関しては影山(1993)を参照されたい）。

- i、統語的複合動詞の前項要素になる。  
→走り続ける、吸い始める、…
- ii、語彙的複合動詞の前項要素になる。  
→殴り殺す、泣き疲れる、…
- iii、N-V 複合語の後項要素になる。  
→山登り、値上げ、魔法使い、…
- iv、S 構造複合語の後項要素になる。  
→核持ち込みに対する規制、参考図書持ち出しの禁止、…
- v、V-N の連鎖の複合語の前項に現れる。  
→打ち上げ花火、入れ知恵、置き手紙、…

⑦尊敬語化（お～になる）するときに現れる。

- (10) a. 先生は遅くまで仕事をお続けになった。  
b. 私をお呼びになったのですか。

⑧ある種の接頭辞が付加する場合に「接頭辞+連用形+する」という連鎖の一部として現れる。

→小～、大～、…

- (11) a. 走る→小走りする/\*小走る、踊る→小踊りする/\*小踊る  
b. はしゃぐ→大はしゃぎする/\*大はしゃぐ、笑う→大笑いする/\*大笑う

⑨連用形そのままで名詞として使用される。

→意味的には、様々な種類の名詞が生成される。以下は伊藤・杉岡(2002)による分類の一部。

- (12) a. 出来事: 泳ぎ、争い、眠り、…  
b. 結果状態: へこみ、詰まり、出来、…  
c. 対象: つまみ、差し入れ、使い古し、…  
d. 動作主: すり、見張り、見習い、…

### 3. 理論と活用に関する仮説

#### ◆拡散形態論 (Distributed Morphology)

- ・本発表では文法のモデル、特に形態論、統語論および辞書 (Lexicon) の関係について拡散形態論 (Distributed Morphology) の立場をとる<sup>2</sup>。特に、次の二つの仮説が本発表にとって重要となる。

- (13) a. 形態 (morphology) は統語部門の後で決定される。  
=語彙挿入は spell-out 後に行われる: Late Insertion  
b. いかなる語形成も統語部門において行われる<sup>3</sup>: Single Engine Hypothesis (Arad(2003): 738)

<sup>2</sup> DM の具体的なモデルに関しては Halle and Marantz(1993), 森田(1999), Embick and Noyer(2001)などを参照されたい。

<sup>3</sup> これは DM の枠組みを用いた研究においては以前からよく仮定されているということに注意されたい。Arad(2003) はそれに明確な名称を与えているので引用した。また、全ての語形成を統語部門で扱うという立場は DM においてのみ仮定されるわけではない (Borer(1998), Ackema(1999)を参照されたい)。

#### ◆活用形に関する仮説

- ・本発表では、活用形に対して次の仮説を提案する。

##### (14) 活用形の決定に関する仮説

(動詞の) 活用形はその要素が持つ形態統語論的素性や形式素性など、完全に **Syntax** における要素によって決定される。

- ・この仮説はDMの立場からは自然な考え方である。活用が文内の統語論的要素によって決定されるのであれば、その統語構造が全て形成された後で形態が決定されるという **DM** の考え方と非常に相性が良いと思われる。

#### ◆終止形、連用形に関する形態論的規則

##### (15) a. {V, T[-Past]} ↔ 終止形

##### b. {V} ↔ 連用形

- ・連用形とは「動詞語幹そのもの」である。
- ・一つの節点 (node) 上に上のような集合が形成された場合に、対応する形態が挿入される。
- ・上の二つの規則に現れている要素以外のいかなる要素も動詞の形態 (活用形) の決定には関与しない。重要なのは T[-Past] の有無である。
- ・この仮定は連用形の形態論的特徴にも根拠を見つけることができる。  
→一段動詞 (母音語幹動詞) の連用形は語幹そのものであるのに対して、五段動詞 (子音語幹動詞) には何らかの形態変化がある。

##### (16) a. 一段動詞: ...CV→CV (tabe → tabe)

##### b. 五段動詞: ...C →CV (oyog → oyogi)

- ・この V (母音) は語中音添加 (epenthesis) であると考ええる。  
→すなわち、動詞語幹だけで形態音韻論的に問題が無ければそのままであり、問題がある時は形態音韻論的な調整によって音添加が行われるということである。この事実は連用形が「語幹形」とでも言うべきものであるということを示している。
- ・DM の立場を採って始めて、これらの考え方は自然に採用することができるものである。なぜなら、動詞語幹が派生の段階でどの要素 (素性) と集合を成すか (成さないでいられるか) は統語構造が全て形成されてからでないとわからないからである。  
→特に、連用形とは語幹形であるという発想は統語部門の前にすでに連用形という形態が決定されていると考えると形式化が難しい。「最終的に色々くっつかないでいること」が連用形の成立条件なので。

## 4. 分析

### ①動詞句をとりたてた時に現れる。

##### (17) a. 大声をあげすらする。

##### b. [TP[VP[XP[VP 大声を あげ]すら]t]する i]

- ・動詞語幹と時制辞の間にとりたて詞が介在しているので、両者が同一の節点上に存在しない。  
→時制を支持している動詞「する」は終止形で現れている。

- ②一部のいわゆる助動詞に前接する形態として現れる。  
→そうだ (様態)、ます、…
- ③連用形の形態のみで従属節になる。
- ④一部の接続形式に前接する。  
→て、ながら、つつ、に (目的)、たら、たり、…
- ⑤動詞句や動詞そのものに付加し範疇を変化させる接尾辞の前に現れる。  
→～方、～手、～役、～主、…

- ・②、④の各要素については、補文として定形の TP を選択しないと考えれば連用形が現れることが予測される。
- ・⑤については、接尾辞が動詞そのものまたは動詞句に直接併合され、全体として名詞(句)を形成するので、動詞が  $T^0$  などへ移動することは無く、連用形が現れると予測される。
- ・③と④の一部に関しては多少問題が複雑になる。  
→これらの要素は従属節に独自の主格を持つ場合がある。

- (18) a. まず太郎が走り、その後しばらくして僕が走ることになっている。  
b. ここで雨が降たら、みんなが困る。

- ・主格の有無と時制辞の有無が相関関係にあるとすると (竹沢(1998)など)、(18a, b)の従属節中にも時制辞が存在していると考えなければならない。  
→このような場合は、なんらかの理由によって動詞が  $T^0$  へ主要部移動しないために、(15a)が適用されないと考える。

⑥複合動詞の要素として現れる。

- ・どのような複合語をとっても、その内部に T[-Past] という要素を含むことはないと考えられる。例えより複雑な構造を形成したとしても VP や AspP までであろう。従ってそこに現れる動詞要素が全て連用形として現れるということは予測される。  
→連用形が統語論的に決定されるのであればそれを含む環境は全て統語部門において形成されるはずである。(少なくとも連用形を含む) 複合動詞は全て統語部門で形成される<sup>4</sup>。すなわち、連用形に対する DM 流アプローチと複合語に対する DM 流アプローチは独立した動機から同じ方針を導き出している。

⑦尊敬語化 (お～になる) するときに現れる。

- ⑧ある種の接頭辞が付加する場合に「接頭辞+連用形+する」という連鎖の一部として現れる。  
→小～、大～、…

- ・「お」、「小」、「大」などの接頭辞が付加して、動詞が「重く」なったために  $T^0$  へ主要部移動できないと考える。

⑨連用形そのまま名詞として使用される。

- ・このような場合、ゼロ形の名詞化接辞が付加していると考えられる。そうすると例えば名詞「泳ぎ」の構成は次のようになる<sup>5</sup>。

- (19)  $[N[v \text{ oyog}] \phi_N] \rightarrow \text{oyogi}$

<sup>4</sup> この主張は既に Nishiyama(1998)によって成され、影山(1993)への批判も共に検討されている。

<sup>5</sup> 機能範疇  $v$  を含む構造を考えると、その構成は  $[N[v[VP \text{ oyog}] \phi_N]]$  となる。この問題についてはさらに考察を深めたい。

・ここでもやはり動詞語幹“oyog”が T<sup>0</sup>へ主要部移動する可能性は無くなるので、(15b)の規則に従って、連用形が具現する。

→すなわち、これらは動詞の連用形が品詞を転換された「連用形転成名詞」ではない。動詞そのものが名詞化された場合に「たまたま」現代日本語の形態論的規則に従って形態的には連用形となるのである。従って、これらの名詞を単に「連用形名詞」と呼ぶこととする。

このような名詞も統語的に構成されるということであるが、例えば連用形名詞は統語的な接辞を含むことがある。

- (20) a. 嫌がらせ→iyagar+sase+φ<sub>N</sub>  
b. ぼけたがり→boke+ta(i)+gar+φ<sub>N</sub>  
c. ほめられたがり→home+rare+ta(i)+gar+φ<sub>N</sub>  
(cf. 思わせぶり→omow+sase+bur+φ<sub>A</sub>, 思わせぶりの態度)

・興味深いのは「思わせぶり」の例である。この場合、品詞は形容(動詞)であるが、形態的にはやはり「連用形」である。この例もやはり「連用形」であることも、本発表の分析から予測することができる。

## 5. おわりに

◆活用形の決定を純粋に統語論的に規定し、DMの枠組みから捉えることによって、これまでほとんど捉えることができていなかった連用形の現れる多種多様な環境を(連用形そのものに関しては)一つの形態論的規則で捉えることができた。

これによって、日本語の形態統語論的研究にDMという枠組みが有効であることを示し、これまで等閑視されてきた感のある「活用」という現象の統語論的研究に対しても一つのケーススタディを示した。

### 【参考文献】

- Ackema, Peter(1999) *Issues in morphosyntax*. John Benjamins Pub Co.  
Arad, Maya(2003) “Locality constraints on the interpretation of roots: the case of Hebrew denominal verbs,” *Natural Language & Linguistic Theory* 21. pp.737-778.  
Borer, Hagit(1998) “Morphology and Syntax,” *The Handbook of Morphology*. Andrew Spencer and Arnold M. Zwicky(ed.), pp.152-190.  
Embick, David and Rolf Noyer(2001) “Movement operations after syntax,” *Linguistic Inquiry* 32. pp.555-595.  
Halle, Morris and Alec Marantz(1993) “Distributed Morphology and the pieces of inflection,” *The view from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvan Bromberger*, Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser(ed.), pp.111-176, MIT Press.  
伊藤たかね・杉岡洋子(2002)「語の仕組みと語形成」研究社  
影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房  
森田順也(1999)「分散形態論の概要と展望」『金城学院大学論集』179 pp.409-429  
村木新次郎(2002)「連用形の範囲とその問題点」『国文学解釈と鑑賞』67:1 pp.135-139 明治書院  
Nishiyama, Kunio(1998) “V-V compounds as serialization.” *Journal of East Asian Linguistics* 7, pp.175-217  
奥津敬一郎(1981)「“せしめたしるこ” <学校文法活用論批判>」『言語』10:2 pp.18-26  
城田俊(1998)『日本語形態論』ひつじ書房  
竹沢幸一(1998)「格の役割と構造」中右実編『日英語比較選書9 格と語順と統語構造』pp.1-102 研究所出版  
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版